

事

情

明

治

太

平

記

十編

下

特32

562

共世六本

村井靜馬編輯

鮮齋永濯畫

官許

明治太平記

全

東京書林

延壽堂發兌

明治太平記十編

再説支那國

開くべきの勢

敷度應接

あり因循姑息の論

あるの渠

徒ら小日を延

東京書林

再説支那國

開くべきの勢

敷度應接

あり因循姑息の論

あるの渠

徒ら小日を延

明治九年

村井靜馬著

と整へ今も兵端を

又かの總理衙門に於て

鷲ともつらざらやう

と兎と角時日夜遷延さ

又ハ詮術あるを只

我が使節を採り

明治太平記十編下

村井靜馬編輯

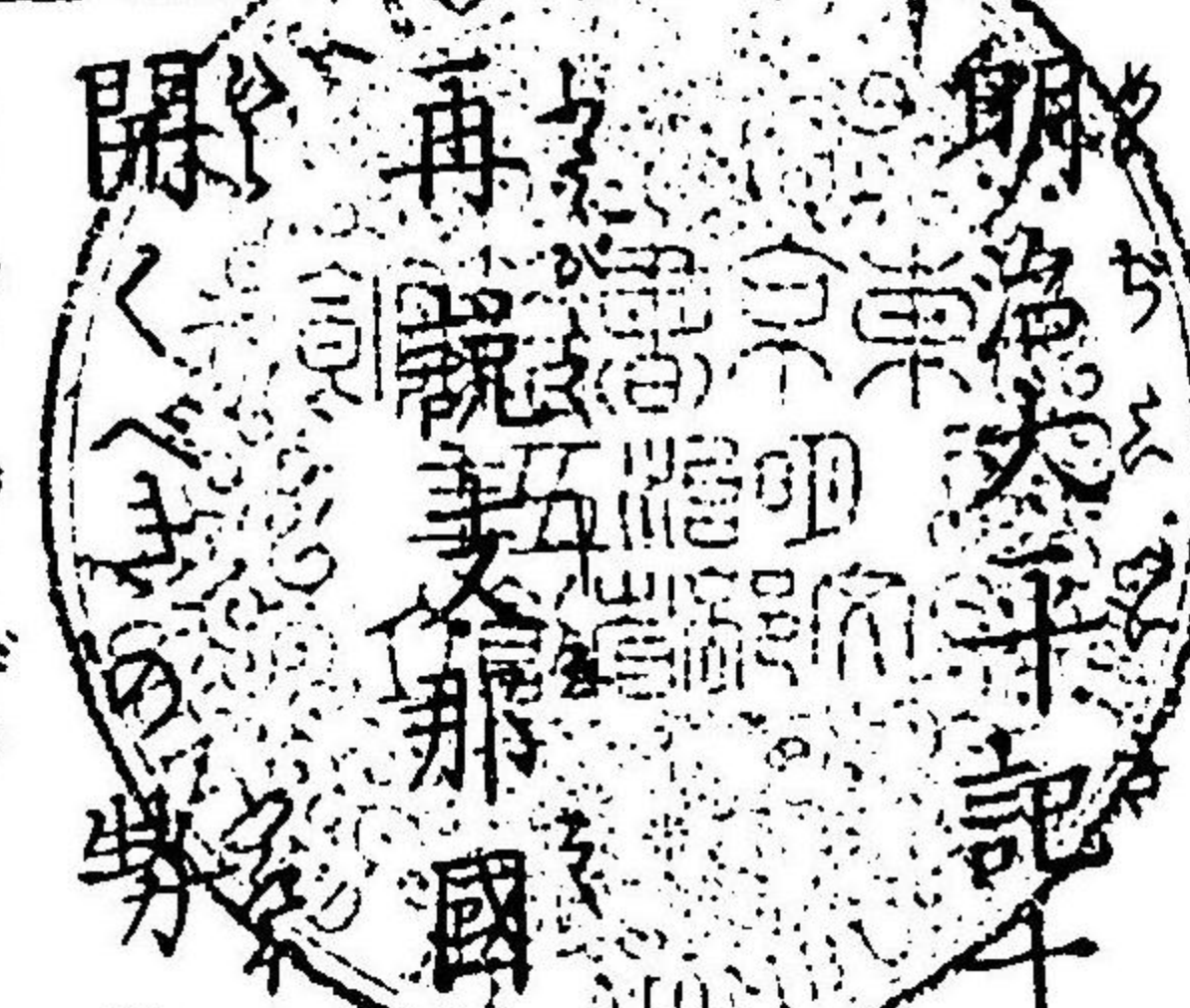
鮮齋永濯畫

官許 明治太平記 全

東京書林 延壽堂發兌

明治九年圖書局交付

村井靜馬著



と整へて今も兵端を  
の總理衙門に於て

敷度應接し及ぶと雖も鶴も鷺もつらざるや

ある因循姑息の論を倣し兔も角時日な遷延さ

まゝの渠に一策ありとの言又へ詮術あるや只

徒らふ日と延まら其情實に我が使節も探り

明治九年十月編

知るべきやうもみる固より大久保大臣より至急の  
 事と決まぐ一々の勅命ハ蒙らるれど和親と破り  
 る兵と交へ勝敗を決する止と得ざるの時より  
 盡さる事ありべ戦ふに屈服さまざる後  
 大要とせ一所也徐る渠が勢いと察一條  
 理と正一と討論あり九月も過て十月もあれ  
 どのやと和戦の決議に至らば是に於て大久保  
 公も大い憤懣の色と露ハ一既一十月九日

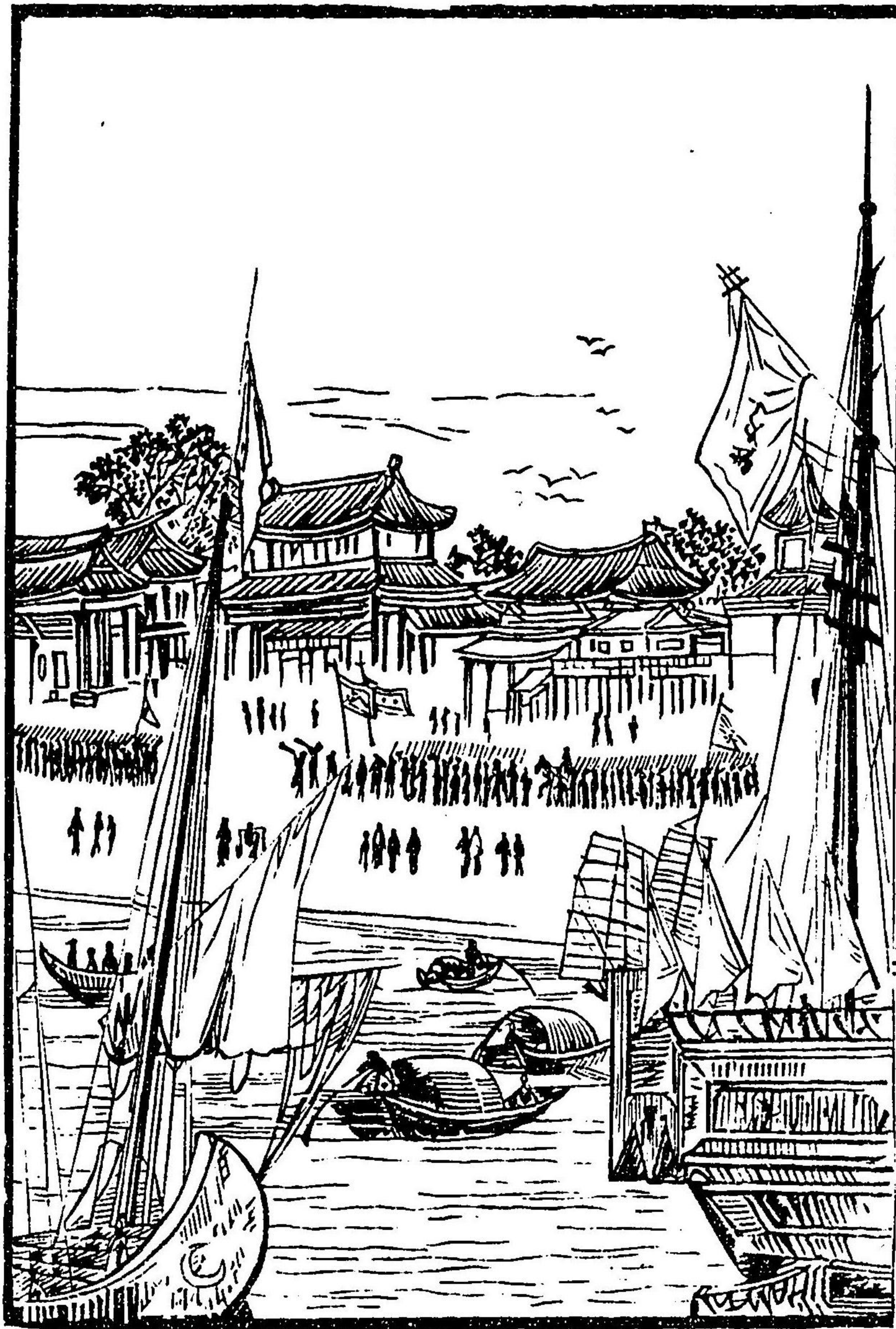
則ち帰朝あまへき旨と支那の政府も言出たて  
 北京と立去り又あま所あつんとせ一とた乍ち  
 總理衙門よりあつと一気と使者と送り来る十  
 五日と期一と必決答と及ぶれば姑く猶豫  
 ありと一と然る十五日に至りてもいまだ評議  
 一定せざると再び五日の日延と乞へり因ツて大久  
 保大臣あつと憤怒と堪むと雖も又あつと  
 辭むと一となく尚逗留と及をれらる余は支那の

政府より既に前にも言ふ如く内慮の和議を決  
 まれども俚俗の負かすもて左右の償金茂  
 出ます支と耻辱と思ふ所よりいさぐ決答に至る  
 く因て全國に布告してよく武備を嚴しせしが  
 就中天津の地多北京と去る支凡四十里頗る繁  
 花の港より人口九十三萬あり實に帝都の咽喉  
 多れば此川口は砲臺と設け且西洋の教師を雇ひ  
 専ら兵隊を訓練し又洋子江と唱へたる長さ

千里もあつるといふ大川の兩岸を新たに基場状  
 築立その他從來設け在りしをあつく修理を加へ  
 たり又上海の製造局の頻り武器を造り立練  
 兵場をも兵と集めて茲にも大に訓練の殊更  
 近頃勇人と募り以て一個の強隊と立んと諸縣に  
 令と下せしふ乍ち召し應ず者一千人よ及べりしを  
 斯の如くふせし程に當今支那の用ゆべき總兵凡  
 七十万尚その上は豫防として四百餘の國毎に或ハ二千

乃至五千と別よ人数を備へ置けり借その七十万人のうち最も器量の勝と一者を急ぎ北京よ召集めて軍務の事と議せしむるよ开中よ雲南の提督馬如龍と喚ぶるの先年長髮賊の乱を起せし時よ臨み大よ各所よ戦ひて武功を屢奏せしる群賊渠名を聞けば戦を乞ふと服せしる斯の如くの豪傑も有り又一人の壯士出て我よ数万の兵を借さば直ちよ臺灣よ渡り日本の騎兵等を速

うふ退治せんよ勇氣よ誇る者も有り中よ最も笑ふべきハ伸鉄とりて砲臺と造らば敵の彈丸霰の如く降来る夏はよとて臺場と破る夏はゆるとて建言あやる族も有り然れども衙門よ々々ハ和戦の二字の決せざる人只徒らよ是等の評議よ時日を費まよつとあれバ譯と知らざる庶民ハ須臾も心と安んせよ殊よ江南と言へる地の竹盡く実と結びハ兵乱の起るべき必よ凶兆あるべし



天津港  
支那人砲  
臺七築  
又善兵  
を練る



腐儒者等々浮説と唱へく大り愚民と惑はせし  
 へふおのく甚と驚怖しに尙も件の前兆の如く日  
 本の兵襲来しと修羅の街とあると久の先年長  
 髪賊のたぬふ乱妨せし如く又苦しむと  
 見る事々と或の悲し或泣く家財を片付け  
 老幼と助けく遠く邊境へ走るもわれバ夫等の  
 準備をまらもわり又或の政府よく和議の談判  
 せしるればや氣遣ふべき更もあしと店を開ける

類ひをわれと寄るもまらも推量の説と立之の  
 更ちと一旦の安堵ありるも夕べの又騒ぎ立ち  
 是が為し測らざる物と費を更多し夫が中あも  
 生學者等々這回臺灣の事件ふ付る種々さるる  
 あり論説と設け専ら日本の所為と貶し只自國  
 との尊大し言ひる者ありと雖もその言と  
 行ひと齟齬する更も尠なく既し支那の兵  
 部局の用達と做せる者政府の命と蒙りて或と



外國の商家に至り「スナイドル」といふ銃砲の弾丸  
 買んと求めし其家より所持せ給と言ふ然るも  
 所處の店先も並べ立たる弾と見るも我が望めり  
 「スナイドル」の弾も齊しき物なるも是は奈何と  
 指さし問へば商家の手代が答へり「何さる外観  
 は善く似たれど此弾も「スナイドル」の筒も適合せ  
 と言ふ彼用達へか返して好し其弾へ我が政府  
 の望む所如く見ゆれば筒も合ふと合はざるは我が

銃は適せば  
 と所ある  
 支那の用達  
 洋店も弾丸  
 を乞ふ



月台の下の様子

問ふ所よりらざると伴の弾と買取とこれ全く  
 政府より軍務ふ心と用ひざる也用達の如き者も  
 斯る所為より及ぶるらん然れども四百餘州の大國  
 ろくはる也人愚人をろの在るもはるト殊よ  
 七十有餘万の兵士と備へ一更もは備兵端張開  
 くふ於て輒く鎮静まきふらざると眉と擧むる  
 者多かり介べま本邦よこの這回大久保大臣と支那  
 へ差遣はせしむも固より事と穩くふして和議と全ふ

せんと言ふ御旨趣よりらると雖も已と得ざるも及び  
 る臨機の變に應ぶるの備まきしと慥ひごとく尚  
 使臣より報知よりえ布告まき更らるる一と政府  
 より一と全國へ告諭ふ及むれらるる一と素より倭  
 魂ひらる御國人の更あまは誰う憤激せざるべき今  
 少も開兵と言ふとらるる海陸軍のうちよ加り争ひ  
 皇恩の萬分の一とも此時よを報ぜんと志操ある  
 壯士等へ殺後れトと從軍と請出る者夥しく中め

薩州の舊藩士凡一萬八千人を一切の入料自費及び  
 軍み従ちん支と願へを旧土州藩七千人旧廣島  
 藩千八百人旧彦根藩八百三十四人旧古河藩百八十  
 五人旧川越旧高崎の両藩合せて百廿九人旧飯田藩  
 百四十九人旧宇都宮藩五百人其他金澤大聖寺明石  
 林田郡山内館林等の旧藩士且つ学校の教員ハ  
 さうあり僧侶平民に至るをも國の爲に一命と鴻  
 毛の輕き無比一名ふり入支那の大軍とも物の数とも

思をば〜この這回の軍に加へんと乞出る者數万に及べ  
 り又軍資とて献金と願へる者若干の中ハ毛  
 桂静寛院の両宮の御賄料の内を以て金千円を献  
 けんとし華族は於て箱葉正邦直ちふ一千圓張  
 献ト別ニ家禄の内張以て一ケ年二千圓ヅ事落着  
 及ぶを毎歳献納するべしと願ふ事又開拓の長官  
 黒田清隆へ開拓の入費を減下せし十萬圓を納め外ハ自  
 分の月給の内四分の三を毎月納めて軍資の足しに做し

たるの旨委情と具し書ふ記しと稟し出られしと  
 同ト開拓官員の松本十郎外十三名も皆俸給の内  
 を殺し献納ししと趣き依俱し出願せしと又  
 大分縣の商客たる廣瀬貞藏と又る者へ家事の  
 入費と省畧し且つ商賣の利徳と以て軍資の端と補  
 ふんと願ひ青森縣の賈人野村三郎へ元祖より所持  
 せる天保度の古二朱金二百兩を取出しと軍資金ふと  
 懇願せり斯の如くふ有志の族或は兵士ふ加らん

請ひ又と軍資と出さんと願ふもの尚此他ふも許多  
 在らんが別て殊勝ふ聞ゆるに當時神奈川縣裁判  
 所は雇ひ置る佛蘭西人より名と「エツロヘル」と喚  
 ぶより人より献金の願ひらう則ち願書の大意と言  
 へる這面支那征伐のため出兵の準備在らせらるの  
 風説最も廣大なまは入費も又多分あると尤も  
 御國の庶民より献金もあるべきが臣は外國出生と  
 言へども又し皇國の恩澤を受し後聊ら報ひ奉

日蓮正宗御書

九

佛人軍資  
金と献納  
為んと書  
を裁判局  
に出す



らんと毎月臣ふ賜つる所の月給の内よりして瑣少  
多々五十円づ献納したる趣き依政府へ願ひ  
出たりとぞ此頃も華族方より會館と設けらる  
時々此館に集會ありしが憊る國家の大事件を  
望しと見るべき支まらる終に臺灣征討の始りより  
今支那政府の應答の次第具さふ示しあるらば我  
輩かのく分よ應ずる力を致しと渥恩の万分の  
一を報したる意志あるの趣き依上書しと請をれ

たり然るも大坂府の知事渡邊昇その上書あり  
 一紙听て華族方の志と感と書と會館も送り  
 曰く方今士民同權の際よかいと獨り華族の  
 稱よめり士民の上小位まるとそのハ蓋し其祖先  
 國家よ功勞ありと以て永く國家と休戚と共よせん  
 との聖慮みゆると知るる然るも今海外測らざるの  
 難と醸し一旦兵端を開く實よ皇國の安危小関  
 ち豈も華族力と致すの秋みゆるや兵の最も

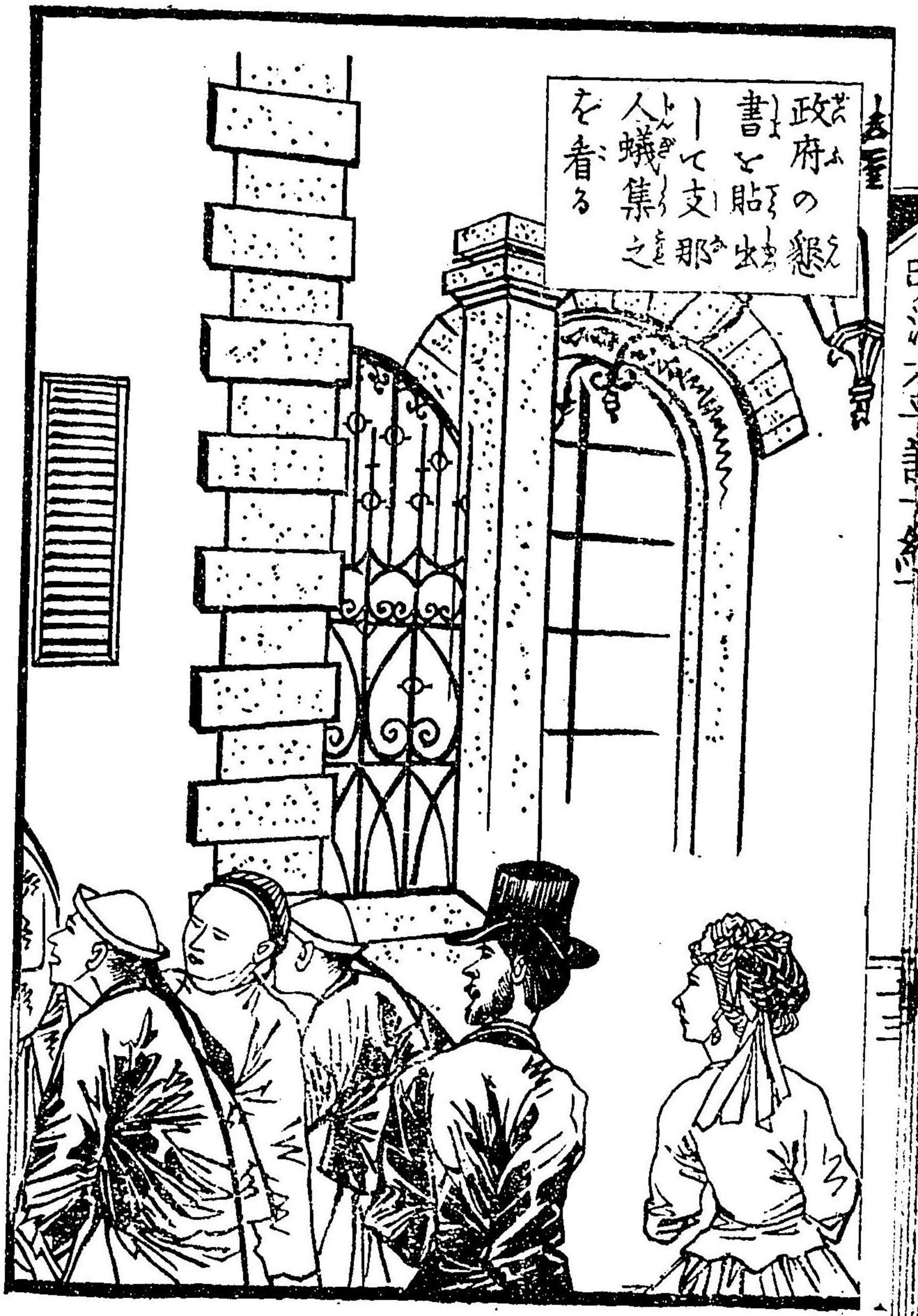
要とまる所を財用よわり今官庫限りわりの財  
 を以て軍資も充るも恐らく其終と全ふまると  
 保つて近頃聞く諸公鑛路を青森よ開くの議あり  
 其計算家禄十分の一即ち一歳九十餘万円と用ふ  
 べしと夫鑛路ハ洪益と雖も今日の急務よわり  
 希はくも之と移して軍資の一端と助け家禄の五令  
 と出さる四百五十万円と得べしとを以て今日の  
 軍資も充て戦勝も及んごの政府より彼の償金を

以之速之之返入るの道は是諸公に於て曾  
て大つ損する所は万一事の危急に至らば覆  
の下に完卵を華族豈に獨り其禄を保つを得ん  
ど最懇ろに言送りて華族等猛可に會合して種々  
評議を凝らさるる此時方り政府に最も  
寛仁の御處分あり其故と奈何とあり當時橫濱其  
外の開港場は居宅を設けて在留せる支那人等  
這回兩國の和議破れ尙鬪争及びる奈何あり

憂目ふゆをんうと甚ど苦慮する趣き後朝廷憫然  
に思召され則ち之を諭さるる往年臺灣の  
民等我が日本の人民數十名を殺戮掠奪せし  
ゆを以て己に其罪を問ひ我が人民に之を再び其  
害を遭ふ莫あらずめんが為ふ其處分をなせり時  
に清國の政府異議するよう我が政府より官負を  
派し以て談判せしむ未だ決せざるあり聞く汝ら  
清國人等兩國の交和保ちがごとと急ぎ一旦戦の



政府の  
書と貼  
て支那  
人集  
を看  
る





端と開くふ及ぶ其身の乍ち捕縛せられ其財物も  
没收せしむると過慮を度百端も身と措所と  
知らざるより果して聞かぬ如くんハ實に憫むべき者  
あり假令己と得ざるふ出らざる兵端と開くふ及ぶと  
雖も汝寄留の清國人等何の咎らざる苟もその  
間諜探偵戦事小関ト云我國の妨害となす者な  
らざれば之と捕縛一之と剽奪する等の度ハ我々大  
日本政府の爲む所あり汝宜しく此意と體一將來

我が政府の法令に遵ひ安堵し其業を営み決  
て動搖あるものと書記して之を示されし是亦於て  
居留の支那人初めと心を安んじし歡ぶ支限りなく  
横濱に在る族ハ中華會館と唱へる渠等が集會  
所の門口小件の告諭の趣き度貼出し示せし  
寄留の支那人走集りて先を争ひ讀むものなり筆  
を出しし寫しをり或ハ上海香港小行く郵便を  
とふ遠く托して古郷の親戚朋友小告る輩も多し

明治六年紀事編年

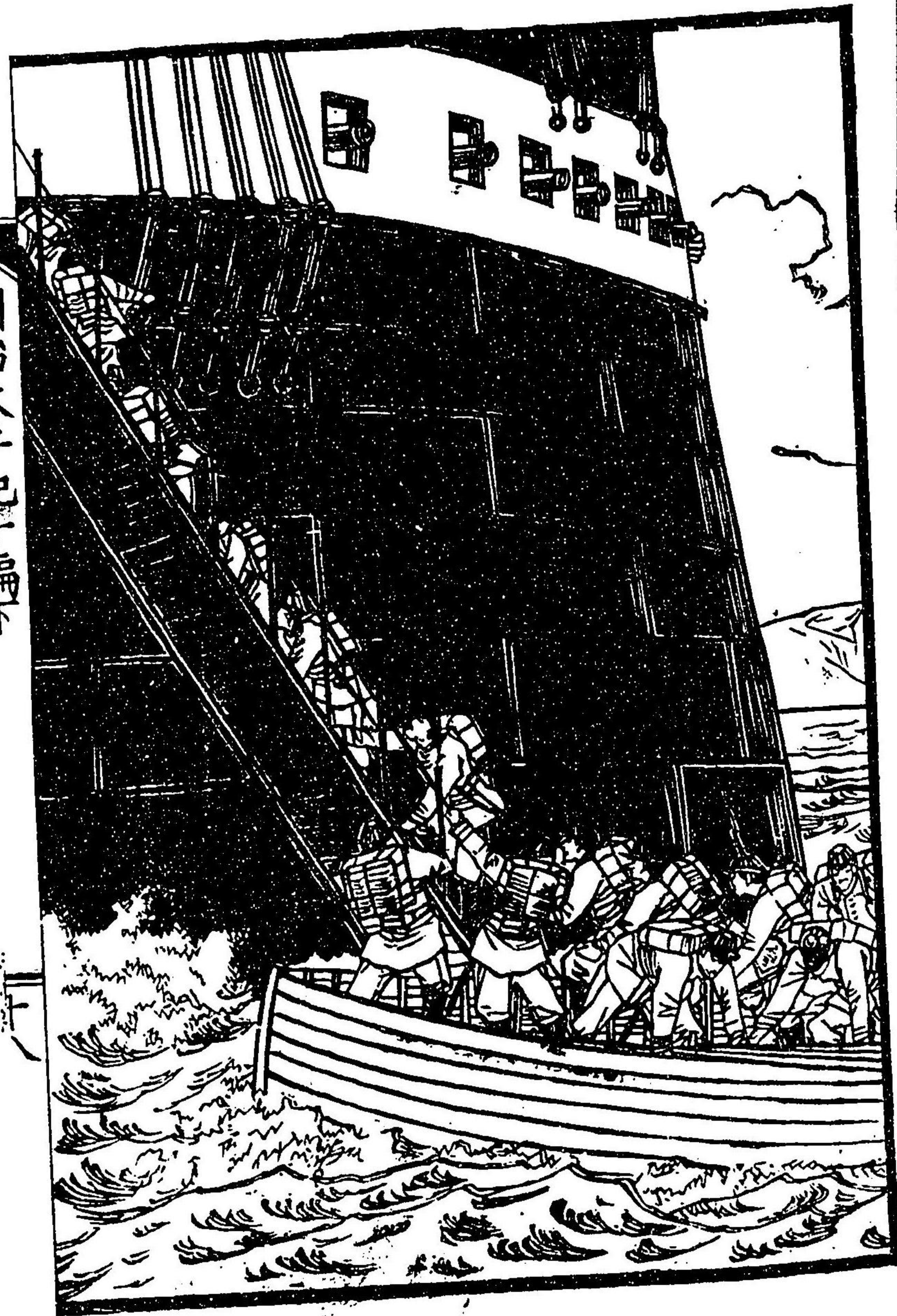
十一

る是より先朝議らる兵と支那に向んる尚然る  
 へき軍艦の敷艘多く一々慥ひごとくと既小頃日外國  
 よう二艘の蒸気船と購へるとたり其一艘を「モリエル」  
 と号し價拾一万七千兩許り又一艘を「コンタイル」号  
 し價拾一万六千八百兩許りとを則ち「モリエル」を  
 瓊浦丸と改め「エンタイル」を豊島丸と名づけ俱小  
 横濱に繋ぎ置き又英國へ注文せしむる一鑛造  
 の軍艦ら近き小成功をせし付る何とて人名我

鏤割んと彼の國より問しる則ち高千穂丸と  
 言ふ名我選びて送らるたり斯くの如く小船を  
 整ひ儲まりて陸軍海軍に於るも兵我練り武器  
 我作りて専ら準備ふ及び一所支那の談判決  
 議ふ至らるる渠より一兎小角と時日と遷延さるるも  
 頻り小軍備と整へる卒と言ひ一戦小も及ぶべき  
 の勢ひありと追々注進ありて敵小夫等の備  
 へつるに我も急を急と在るべきありと先隊の將士

等軍艦に乗じて先づ長崎まで出でて  
 切とあると言ふ支那の一左右の次第直ち彼  
 地を攻蒐らんとかのく決死の勢ひ成る一東京  
 へん進發せり實や國の強弱の大小より兵の  
 利鈍の衆寡より和と不和と鍊と不鍊と  
 只此ニツ小つりと雖も國の大小を以て言へば渠を  
 四百餘州つりて我の七十餘州たり兵の多少を論  
 ぶれば渠を七十餘万小して我兵ハ尚數萬小過

む衆寡の差ひ斯の如き我將士等一和協力  
 此強敵に當らんとする勇肝最も感むべし徳本邦の  
 人民の事に関係なるも拘らざるもあは  
 る苦慮痛心となす程なれば別と支那國に滞  
 在する大久保柳原の両公のさきあり其他隨從の  
 諸官負の心中介と察しらるるほど両公の尚  
 泰然と一屈する色なく種々應對ふ及び一末  
 既し十月十五日返答し及ぶべき所尚まて五日の



海陸軍の兵  
士等大艦よ  
乗じて長崎  
に至る

日延り候る約定の日に至れば最早須臾も猶豫  
 せど其日大久保大臣より總理衙門に出頭あり  
 此時まをも渠よりいひまじ償金の語を發せば我  
 大臣も償金などの卑劣ある事と言ふに専ら  
 條理を立立てる手詰の議論及び是非此日  
 と過ぎば其決答と听んとあるのみを今ハ支那の  
 大臣も遁る辞やなるとらん然らば貴國の軍費と  
 我に於て償ふべければ臺灣に於ける兵士等と速

うふ退けらるるに餘義なく此語を發せると大久  
 保公より听く貴國償金と出さんとあり我は兵  
 を退けせんが夫ふ付るに決議及び一約書を  
 互ひに取交し後日の異論なきべしと言へども  
 渠に諾えば君も日本皇帝の大臣我も則ち支那  
 皇帝の大臣とてあるものと既ハ總理衙門に於て  
 両大臣が相對し是等の約と結べると尙之とす  
 信ぜらんバ又何ものや信まじき約書及び夏

久と辭ひ後聽くべし返して開の稟さるる夏なる  
 兩國の間ふ於る倦る重大の事件あると倘後來の  
 證とある約書多終よ至りて何と以てり結局とせんと  
 辭を尽し理と押てさめぐ論談ゆりうと約書ふ  
 おひくの奈何しても出さるべきの趣き返答ふ及び  
 う大久保公も今いたる是迄ありと意を決してゆく  
 然る上この事則ち爰に決せり臺灣生蕃の地は於て  
 我が大政府の目的と貫き蕃民を教化し土地を開き

以て将来航空の安寧を保護するの方法と建べし  
 と断然と言放ち席を立んとする程ふ此時支那の  
 大臣も憤りの色面を顯し是乍ち声を掉立て待  
 是よ我も一言と發せん臺灣の地へ悉く我が大清  
 の所有ありと爰に至りて双方の談判遂に手切し  
 及べば大久保公もさし措び直ちよ旅館に立候り  
 急ぎ帰朝の準備を整へ此月廿六日ふ至り明日此地  
 を發足するより總理衙門に通達せり倦る浮沈の

時<sup>とき</sup>に至<sup>いた</sup>り其<sup>その</sup>頃<sup>ころ</sup>北<sup>きた</sup>京<sup>きやう</sup>在<sup>あ</sup>留<sup>りゆう</sup>の英<sup>えい</sup>國<sup>こく</sup>の公<sup>こう</sup>使<sup>し</sup>に<sup>て</sup>ソ<sup>ソ</sup>ル<sup>ル</sup>ウ  
エ<sup>エ</sup>ー<sup>ー</sup>ド<sup>ド</sup>と<sup>と</sup>言<sup>い</sup>へ<sup>る</sup>人<sup>ひと</sup>大<sup>だい</sup>久<sup>きう</sup>保<sup>ぼ</sup>公<sup>こう</sup>の旅<sup>りゆう</sup>館<sup>かん</sup>に<sup>き</sup>来<sup>き</sup>り<sup>て</sup>更<sup>さら</sup>ふ<sup>懇</sup>談<sup>かん</sup>  
み<sup>み</sup>及<sup>およ</sup>べ<sup>る</sup>夏<sup>なつ</sup>ゆ<sup>り</sup>其<sup>その</sup>趣<sup>おもむ</sup>き<sup>紙</sup>綴<sup>づ</sup>ら<sup>んと</sup>ま<sup>る</sup>ふ<sup>毎</sup>卷<sup>まき</sup>紙<sup>し</sup>頁<sup>ぺ</sup>  
の定<sup>ちやう</sup>額<sup>がく</sup>ゆ<sup>り</sup>る<sup>な</sup>や<sup>記</sup>ま<sup>た</sup>き<sup>の</sup>餘<sup>よ</sup>紙<sup>し</sup>ゆ<sup>り</sup>ぬ<sup>が</sup>开<sup>ひ</sup>ま<sup>す</sup>  
次<sup>つぎ</sup>の編<sup>へん</sup>を<sup>み</sup>て<sup>知</sup>る<sup>べ</sup>し  
明<sup>めい</sup>治<sup>ち</sup>太<sup>たい</sup>平<sup>へい</sup>記<sup>き</sup>十<sup>じゅう</sup>編<sup>へん</sup>卷<sup>まき</sup>之<sup>の</sup>二<sup>に</sup>終<sup>つひ</sup>

版<sup>はん</sup>權<sup>けん</sup>免<sup>めん</sup>許<sup>じょ</sup>明<sup>めい</sup>治<sup>ち</sup>九<sup>く</sup>年<sup>ねん</sup>二<sup>に</sup>月<sup>げつ</sup>十<sup>じゅう</sup>四<sup>し</sup>日<sup>にち</sup>

定<sup>ちやう</sup>價<sup>げ</sup>廿<sup>じゅう</sup>五<sup>ご</sup>錢<sup>せん</sup>

第<sup>だい</sup>六<sup>ろく</sup>大<sup>だい</sup>區<sup>く</sup>八<sup>はち</sup>小<sup>しょう</sup>區<sup>く</sup>  
本<sup>ほん</sup>所<sup>しょ</sup>外<sup>がい</sup>手<sup>て</sup>町<sup>ちやう</sup>十<sup>じゅう</sup>八<sup>はち</sup>番<sup>ばん</sup>地<sup>ち</sup>

著<sup>しやく</sup>者<sup>者</sup> 村<sup>むら</sup>井<sup>い</sup>静<sup>せい</sup>馬<sup>ま</sup>

第<sup>だい</sup>壹<sup>いつ</sup>大<sup>だい</sup>區<sup>く</sup>六<sup>ろく</sup>小<sup>しょう</sup>區<sup>く</sup>  
日<sup>にっ</sup>本<sup>ぽん</sup>橋<sup>はし</sup>通<sup>とう</sup>二<sup>に</sup>丁<sup>てい</sup>目<sup>もく</sup>四<sup>し</sup>番<sup>ばん</sup>地<sup>ち</sup>

東<sup>とう</sup>京<sup>きやう</sup>  
書<sup>しよ</sup>肆<sup>し</sup>

版<sup>はん</sup>主<sup>しゆ</sup> 小<sup>しょう</sup>林<sup>りん</sup>鉄<sup>てつ</sup>次<sup>じ</sup>郎<sup>らう</sup>藏<sup>ざう</sup>

